

自分の好きな事なら苦にならない

彩藤ひろみゼミ 経営情報学部3年 植松 盛樹

私は彩藤ゼミでデザイン系の事を学んでいます。

最初に入ったきっかけは、単純に将来デザインに関係するような仕事に就きたいと思っていたので、何かその力になるような事を掴めたらいいな程度の気持ちでした。しかし、実際にゼミに入り、活動をしていると新しい事や、知っていた技術のもう一步先の事を学ぶ事が出来ました。

元々私はパソコンで絵を描いたり、様々な所からポスター等の制作の依頼を受け、作成したりする仕事をしていたのですが、その時は自分の持っている知識だけで作成していたのですが、ゼミに入り、画像編集の仕方、効果のかけ方、ペンや色によるイメージの違い、表現の方法などを学ぶことが出来、前に比べてより良い物が作成出来るようになったと自分でも思います。本当にやりたい事や、自分の好きな事ならどんな知識や技術を吸収していけるし、それが苦になることもないと思うので、私はこのゼミに入って正解だった、と感じています。それと同時に、まだまだ知らない事もあるので、それを学ぶ楽しみも同時にあります。詰め込みすぎてもパンクしてしまうだけなので、ゆっくり確実に、楽しみながら出来る事を日々増やしていこうかな、と私は思います。



応募パンフレット作品

最先端技術をマネジメント

彩藤ひろみゼミ 経営情報学部3年 釜瀬 雅子

私が彩藤先生のゼミに入った理由は、3DCGの最先端技術を身につけられるだけでなくそれをどのようにいかして活用するかその作品の良さをどのようにアピールするかというマネジメント能力を身につけられると考えたからです。

ゼミでは、blenderによる透過や反射の技術を使ったシャンデリア、アリスワンダーランドのチェシャ猫などを制作し、junaioでバーコードを読み取ると3D化した作品が360度見ることが出来るという物を作りました。チェシャ猫の作品では目の部分に透過の技術を入れリアリティを追求しました。多摩祭では、プロジェクションマッピングを使ったファッションショーと人形のドレスを制作しました。プロジェクションマッピングでは、自分がモデルになることでどのように制作するのがいいかなどの制作する側だけでなくモデルになる側の視点を学びました。また、このファッションショーではビセルビーズアカデミーの北村さんに協力していただき、ネックレスとドレスを貸してもらいました。ファッションショーの構成では最後にビセルビーズをフィナーレとして盛り上がるように設定しました。

結果としてこれらでやった企画は、最先端の3DCG技術をどのようにマネジメントすることができるかについて勉強しました。私は3月から本格的に就職活動が始まるので、ゼミで学んだ3DCG最先端技術、作品の良さを引き出すためのマネジメント力、企画を成功させるため計画力・団結力など、これらをいかして他の大学生との違いをアピールしていきたいと思っています。



3DCG エンジェル作品



チェシャ猫

ZERO to One ~ゼロから価値を生み出す~

見山謙一郎プロジェクトゼミ生

プロジェクトゼミ「見山ゼミ」がテーマとする「BOPビジネス (Base of the Economic Pyramid business)」とは、全世界人口の約7割に当たる、年間購買力平価が3000ドルを下回る層 (BOP層・およそ40億人) に対し、支援ではなく、持続可能なビジネスによって、彼らの自立を促すビジネスモデルです。老子曰く「人に授ける魚を以てするは、魚を以てするに如かず」のように、これまで途上国支援といえば、物資支援やODAなどの金銭的支援すなわち「魚を与える」支援が主流でした。しかし、それでは支援を受ける側はいつまでたっても自立できず、また、支援をするいわゆる先進国もかつてほどの経済発展力はなく、支援にも限界があります。そんな中で、「BOPビジネス」と呼ばれるビジネスモデルは「魚の釣り方を教える」ことに主眼が置かれています。ちなみに、混同されがちなフェアトレードは、途上国生産製品の市場が主に先進国にあり、市場をBOP層におくBOPビジネスとは趣を異にします。

2009年度にスタートした見山ゼミでは、これまで株式会社ユーグレナ・出雲社長をゲスト講師にお招きしたり、学生のソリューションを交えたアイデアを、実際の企業 (オリエンタルランド・セブン & アイホールディングスなど) に提案することなどをこなしてきました。

そして2014年度は、株式会社ICnet様が主催する「40億人のためのビジネスアイデアコンテスト」のアイデア部門に応募しました。ゼミでは3つのチームに別れ話し合い、リキシャ (バングラデシュの一般的な交通手段) に蓄光塗料を施し交通事故を減らすバングライトプラン、竹炭を活用した衛生改善プラン、リフィル式のスプレーによる伝染病予防プランをそれぞれチーム単位で応募しました。その中でバングライトプランが最終選考に残り、

3月7日(土)に六本木において多くの観衆が見守る中、最終プレゼンを行い、アイデア賞を受賞することが出来ました。短期間にこのような賞を得られるまでに至ったのは、ゼミ生一人ひとりがしっかり役割を果たしたからであり、パズルのピースの如く、誰一人が欠けても為し得ませんでした。大学特色の一つである一年生から所属できるプロジェクトゼミは、学生にとって得難い経験を多く得られます。より多くの在学生在が素晴らしい経験を手に入れられることを願います。

今、日本のような先進国でビジネスを立ち上げようとしても、大抵は他者によって先を越されている場合が多いです。その点、途上国でのビジネス立ち上げは確かにリスクは伴いますが、その分、夢を実現しやすいフィールドでもあります。なぜなら、現時点での途上国のビジネス地盤はZEROであり、どの企業もこれから価値を創り上げていくからです。2015年度の見山ゼミは、春、秋の通年開講となることから、2014年度以上にビジネスプランの精度を高め、入賞を目指して複数のビジネスプランコンテストに応募したいと思っています。意欲ある多くの学生が、見山ゼミに参加することを期待します。



受賞時の見山先生とゼミ生の様子



〈木村知義プロジェクトゼミ〉

メディア実践論の制作現場から

絶景！紅葉に染まる高尾山へ ～ English Expression 登山を撮る～

経営情報学部 1年 杉浦 那由多

まさに絶景！高尾山の紅葉だ。

京王高尾山口駅に着いたホームからも山の景色は一望できたが、駅を出て紅く染まる山を見上げた時の感動は本当に圧巻だった。この紅葉のなかの English Expression 登山。ここから私のロケが始まるのだと思うと胸がときめいた。

私が木村ゼミに入ったのは秋学期から。周りの先輩たちはすでに各々の作品を作り始めていた。右も左もわからないままどんどん進んでいく。正直焦った。「まず、君が取り組んでみたい企画を考えてごらん」と先生から言われた。必死に題材を探す毎日。しかし、なかなか見つからない。そこに、地域プロジェクト発表祭で作品のサマリーを発表すると告げられた。このままでは間に合わないのではないかと、余計に考えが空回りするのだった。

しかし、チャンスは自分から掴んでいくものだ。ある日、私の所属する English Expression のクラスで、「高尾山で外国人にインタビューをする」という課題が出された。日頃から「学内で何か出来事に遭遇したら君たちはカメラを持って走りなさい。記録者になれ」と聞かされていた私は、「これだ！」と思い、すぐさまビデオカメラを借りに行った。

季節は山が紅く染まる秋。記録すべきものはすぐに決まった。高尾山に登るのだから紅葉を記録しない手はないと思った。「記録できるものはすべて記録してやるよ」、そういう意気込みだった。友人と歩きながら、ケーブルカーで頂上を目指しながら、カメラを回し続けた。その中で、日本人だけではなく様々な国籍の人たちが高尾山という場所に集まり、紅葉や登山を楽しんでいることを発見した。高尾山に登る人たちの顔は皆、笑っていた。ビデオカメラを持って現場に立つという経験が全くなかった私にとって、こういったことはとても新鮮に感じられた。何も知らなかった地点から一歩踏み出したと実感できた。

実は、このロケには大事なコンセプトがあった。「大学を記録する」というものだ。大学で行われる行事など身近な大学生活を記録し、伝えることを通じて、いま大学で学ぶ意味や課題について考えるというものだ。今回は紅葉の高尾山に登る English Expression の行事が舞台だった。しかし、撮影後に映像を見てみると、高尾山の紅葉の美しさは追っているものの、そこでの学生たちの活動を追い切れていないことに気づいた。また、そこで発見した、山に登る人々の豊かな表情、魅力的な姿も撮り損ねていた。幸い、地域プロジェクト発表祭に提出できる程度には素材があったが、情報を的確に伝えるということは、現場で何を発見し、それをどう映像で捉えるのかが問われることだと痛感した。

本当はラジオ番組を作りたいと思ってこのプロジェクトゼミに参加したのだったが、音素材でイメージを呼び起こすラジオ番組のほうがもっと難しいということもわかってきた。今回の映像制作の経験はそのための大きな糧になると思う。自分で考えた企画を作り上げることにはなんともいえない充実感がある。高尾山の現場に立って、次のチャレンジに向けて少し成長できたように思う。



さあ！ English Expression 登山へ



大勢の人を惹きつける高尾山

自問自答の4年間、旅立ちの春へ ～「メディア実践論」での格闘から～

経営情報学部 4年 渡辺 光

決して、多くの成功体験を語ることはできない。むしろ、戸惑いや自問自答の日々ばかり。「メディア実践論」の4年間を振り返った時に残る印象はこんな感じだ。しかし、もがき苦しんだ中でも、私が描きたい人達と真摯に向き合う楽しさを見いだせたからこそ、ここまで続けられたのだと思う。

4年前の春、学内に掲示してあったポスターにあった「番組制作」という言葉に惹かれ、木村ゼミに参加した。高校生の時、ドキュメンタリー作家である森達也氏の『A』という作品を見て衝撃を覚えた。フィクションにはない生々しい世界が、そこにはあった。それ以来、ドキュメンタリーが描く人間性や真実性、映像が持つ戸惑うほどの力、そうした奥深さに次第に惹かれていった。そんな私にとって「番組制作」を学べる場が大学にあることは思ってもみないチャンスだった。絶対に参加したい！その一心で、履修を決めた。だが、その時は、その後に訪れる苦難の日々を予想もしていなかった。

ゼミが始まってすぐ、それぞれが撮りたい企画を提案することになった。私は「不登校」を描きたいとずっと以前から温めていた。しかし、これをどう描くかを提案するのはとても難航した。苦心の末に書き上げた提案書を持って行っては、先生から投げかけられる「君は何を伝えたいの？」「本当にそれは『面白い』のか？」という問い。この「面白い」というのが曲者だった。見る人の問題意識や関心に触れるものか、人の心に迫り、想像力をかきたてるものかという深い意味だった。やりとりの最中、冷や汗をかかずにはいられなかった。

本当に自分が描きたいもの、伝えたい思いは何なのか、自分自身に問い続ける日々が始まった。番組制作について学ぶとは、制作のテクニックを学ぶということではなかった。この“自分と向き合う”という営みは想像以上に辛い。社会や人間への眼差し、問題意識のありかたを問われ続ける教室に、離脱する者も少なくなかった。

何回かの企画提案を経て撮影へ。そこでまた新たな壁にぶち当たる。交渉段階では撮影許可を貰っていたのに、いざ撮影という段階で断られたり、取材を進めるにつれ、想定していた展開とは全く違っていたりと、とにかく予想もしなかったことに遭遇することばかりだった。「このゼミは君たちが生きる人生そのものだ」いつもそう言われ続けた。挫折そうなることもしばしばだったが、次第にのりこえる力が湧いてきた。取材相手と信頼関係を築くにはどうすればいいのか、一様な答えがあるわけではないが、諦めず少しずつ信頼を築いていけるようになっていった。大変なことも多かったが、相手が心を開いて自分のことを語ってくれる瞬間に立ち会った時の感動はことばに表せないものだ。それが大きな原動力となっていった。

木村ゼミでの体験がもとになって、卒業後は映像制作の道を志すことを決断した。4月からは「仕事」として取り組むことになる。ここでの格闘を活かし、いつか多くの人の心を揺さぶるドキュメンタリーを作りたいと思っている。



大学最後の作品「着ぐるみ学校」ロケから（聖蹟桜ヶ丘）



“多摩大”への思いから生まれた SGS での成長

グローバルスタディーズ学部 4年 武内 一貴

私が SGS で過ごしてきた 4 年間は常に“多摩大愛”と共にありました。というのも“私”と“多摩大”は 10 年という長い付き合いがあったからです。“多摩大愛”から生まれた「思いと成長」をここに書きたいと思います。

多摩大学の系列校である多摩大学目黒中学校に入学した私は、高等学校と合わせて 6 年間東京都目黒区にある校舎に通いました。高校卒業後の進路は、自らの学習環境や将来を踏まえて SGS に進むことに決めました。少人数プログラムで先生とより近い環境で徹底的に英語を学ぶことができるという点から自分自身が成長するためには最も適している環境だと思いました。しかし私自身、英語に対しては苦手意識が高く、特に英語が得意というわけでもなかったため、「果たしてついていけるのだろうか」とも思いましたし、オープンキャンパスに参加してみると、同じ“多摩大”でも全くイメージが違ったのです。交通量の多い都会の一角に佇む目黒校舎とは違い、SGS は神奈川県藤沢市の閑静な住宅街にひっそりとあり、少し物足りなさも感じました。新しい環境に馴染むことに当初は不安な気持ちでいっぱいでした。系列校推薦という方法で早々に入試を終えた私は、不安な気持ちを払拭するために放課後は高校の図書室で毎日のように勉強しました。授業で使用していた教材を何度も繰り返し、中学レベルの読解問題を解き、基礎固めに取り組みました。TOEIC の問題集を購入して家に帰ってからは、リスニング問題を聞きました。この取り組みが自分の思いを変化させるような土台になるとは当時の私には全く予感させませんでした。

大学入学後は、勉強の成果も出て常に上のクラスで講義を受けることができました。特に 1 年生の AEP では、勉強の楽しさをも見出し、いつしか“多摩大”に対する思いも変化していたのです。当初は、上のクラスに入れたことを喜んでいましたが、現実にはそんな甘いものではありませんでした。私のクラスメートは英語を得意とする学生が多く、レベルの違いを感じました。私が、先生の英語を聞き取ることや英語で文章を書くことに苦労している中、みんなは平然とそれをこなしていくのです。正直、焦りと不安でいっぱいでしたが、わずかに楽しみでもありました。レベルの高い環境の中で、しがみつきながらも乗り越えていくことで成長を実感でき、自信に繋がるのです。いつの間にか英語で英文を書くことができるようになっていて、それを得意とするようになりました。「俺もやればできる」という実感が自信となり、もっと自分の力を発揮してこの SGS に貢献できればと思うことができました。それまでは、ただ長年お世話になった多摩大としか思っていなかったのが、いつしか多摩大に感謝の気持ちを示したいと思うようになったのです。

大学生活に慣れてからは、友達への誘いもあって学生会に入りました。大学内の催し物の運営や地域ボランティアを行っている団体に入ることも私にとっては思いが変化したからこそ決断でした。高校時代は、率先して行事には参加していたものの、先頭に立って運営するとい

うことは好んでいませんでした。しかし、SGS のためにもっと働きたかったのです。大学内の催し物に積極的に参加し、地域ボランティアではイベントの司会を務めることもありました。また、学園祭実行委員として学生人生で初めて学園祭の運営側になったのです。

SGS での生活の中で私が最も力を注いできたことがありました。それがオープンキャンパスの学生スタッフです。高校 3 年生の時にオープンキャンパスを訪れた際にたくさんの大学生に優しくしてもらったことで私もやりたいと思い、入学してすぐに登録しました。一度は壁にぶち当たり、辞めようかと悩んだ時期もありました。半年間、オープンキャンパスの仕事から離れ、改めて考えたときに頭に浮かんだのは、多摩大への思いでした。誰よりも多摩大の良さを知り、それを多くの高校生やその保護者の方々に伝えられるのは自分だと思いました。母校である多摩大目黒の学生はもちろんのこと、多くの高校生に SGS に来てもらいたいと思い、それが多摩大への感謝のふるまいだったのです。SGS で最上級生を迎えた最後の年は、オープンキャンパスの学生スタッフを統括する役目を担いました。自ら先頭に立ってリーダーシップを取るような性格ではありませんでしたが、多摩大への思いから生まれた成長だったと思います。

私が今思うことは、SGS に来ていなければ多摩大への思いも成長もなかったと思っています。自分がこの環境なら成長できると思った以上に、SGS での学びや気風、私が関わった全ての方々に恵まれたのだと強く思います。SGS でお世話になった友達や教職員の方々が多くのチャンスを与えてくれて私は大きく変わることができました。SGS だけではなく、母校・多摩大目黒で関わった方々、10 年間もの間素晴らしい環境を提供してくれた多摩大に私は心から感謝しています。“多摩大”での生活は奇跡と言えるほど楽しく、充実したものでした。私が最後に言えることは、「本当にありがとうございました」の一言です。

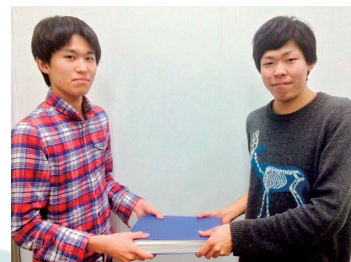


オープンキャンパススタッフと共に

多摩大学経営情報学部学生会執行部 会長就任挨拶

学生会執行部部長 福田 雅之

この度、多摩大学経営情報学部学生会執行部3代目会長に就任しました、多摩大学経営情報学部2年の福田雅之と申します。昨年の学生会の活動は、一年を通し多くのイベントを行い、学生同士のつながりを深めたり、また新しいつながりが出来たと思います。つながりは学生同士だけではなく、学生と教職員の方とのつながりも出来たと思います。人と人のつながりは、新しい発見や知識が増えたりなど私はとても大事だと思っています。なので、ぜひ学生会が主催するイベントに参加してもらい、新しいつながりを作ってもらいたいと思います。学生の皆さんに楽しんでもらえるように、私たち学生会執行部一同、全身全霊で取り組みたいと思います。まだ学生会が発足して来年度で3年目と日がとても浅いため、まだ分からないことはいっぱいなので、他大学がやっていることを、実際に足を運び、自分たちに足りないものを発見し成長をしていきたいと思っています。



学生会執行部主催 留学生歓迎会開催！

学生会執行部 企画・広報課

12月19日(金)にT-Studioにて、留学生歓迎会を開催しました。クリスマスも近く、留学生の国柄の問題もなかったため、クリスマス为主题にした歓迎会を企画しました。交流ミニゲームやプレゼント交換といった参加して楽しむ企画以外にも、小規模ではありましたが、キャンパス内をイルミネーションで彩るなど、雰囲気づくりにも工夫を凝らしました。同日に、石川ゼミ主催のフットサル大会が開催されたこともあり、集客は芳しくありませんでしたが、主役である留学生と、ご来場いただいた学生や教員間で、密に交流を行うことができました。参加した留学生も、大変楽しんでいただけた様子で、留学生にとって、留学生歓迎会が、在学生会との今後の継続的なコミュニケーションのキッカケとなればと思います。

学生会の発足以来、学生会企画以外にも、石川ゼミのフットサル大会や久恒ゼミのフットサル大会など、学内で学生同士が楽しむことができるイベントが増えてきており、学内が盛り上がってきていることが実感できます。しかし、まだまだ企画はスポーツや飲食をメインとしたものが多く、偏りがあるのが現状です。もっと多くの学生にとって、多摩大での大学生活が有意義であると感じていただくために、イベントのジャンルも広がりを持たせ、参加したいと思ってもらえる企画を増やしていきたいです。学生間で、様々な形で大学を内から盛り上げ、個人にとっても価値のあるものにしていくために、学内イベントがPassionから、Actionへとつなぐ動機づけとして活かしていただけるよう、今後も学生会は主催イベントの開催や、ゼミ等への協賛を通じて、貢献していきます。

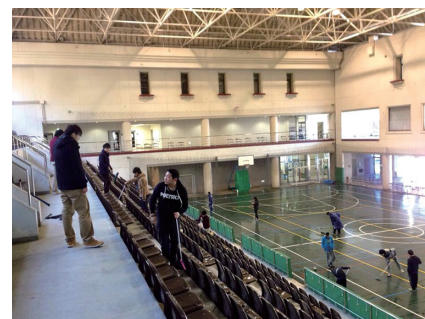


学生会執行部主催 学内年末大掃除の実施

学生会執行部 企画・広報課

昨年初めての試みであったKTC (Keep Tama Clean) 大掃除に続き、今年も、学内サークルの有志により、12月26日(金)に実施致しました。当日は、冷え込みが厳しい中、朝早くから集まり、80名を超える学生の手によって、サークル室の清掃をはじめ、アリーナなどの清掃を行いました。学生会では、大掃除後に参加した学生に鍋の炊き出しも行き、ご好評をいただきました。

今年から、学内のみならず、学外周辺の清掃も行いました。多摩大学の学生に限ったことではありませんが、諏訪・永山地域においても道端にごみがポイ捨てされているのを目にすることがあります。些細なことかもしれませんが、KTC活動を通じて、学生の美化意識向上や、地域への貢献も行っていきたいです。また、多摩地域で学ぶ学生として、来年度以降、KTC活動以外のCSR(社会貢献活動)にも力を入れていき、地域に住む方々とも良い関係を築いていければと思います。



学生会執行部からのお知らせ

多摩大学経営情報学部執行部では、共に多摩大学での生活をより良くしたいと考えている仲間を随時募集しております。ご興味のある方は tamagakuseikai@gmail.com までご連絡いただくか、学生会室(テニスコート向かい)までお越し下さい。